鶉野飛行場について

岡本浩人（当時、加東郡社町在住　10 歳頃の話）

昭和二十（一九四五）年、小学校六年生の時、勤労奉仕で家から十一キロメートル先の加西鶉野の飛行場建設現場へ行った。「一家に一人は必ず出ること」と強要され、人を雇うなどかなうはずもないと判断した私は、自分が行くと決めた。自転車もなかったので、鶉野へは歩いて行った。初めて行く日には、とにかく加古川線の社駅に向かって行って、駅から上を向いて、河高というところを上がって行くようにと聞かされていた。河高といってなにか坂を上がったという記憶や、それから左の方へ入っていったという記憶はある。河高の辺りに農家がちょこちょことあって、おばあさんのような方に聞きながら行ったという記憶もあるが、鶉野の近くに山のようなものとか、池のようなものがあった記憶はない。

朝まだ暗いうちに出発した。帰りは暗くて困ったなという感じではなかった。道がはっきりわかっているので、安心していたということもあると思うが。とにかく歩くのが大変だったな、遠いなと思った。時期は春休みぐらいではなかったかと思う。鶉野へは、これというような弁当も持っていけなかった。麦八割で米二割も入っていたらいい方で、麦飯を米でつないだような弁当だった。そのような弁当を食べてやっていたので、「よくぞ今日まで生きたり」と思う。

鶉野では、主に大きな金網を引っ張って敷く作業をしていた。金網の巻き筒は、直径が一メートル五〇か、二メートルもあるようなものが置いてあり、その端にロープをかけて引っ張り広げる作業だった。二人で引っ張っていたと思う。引っ張って広げること自体は簡単なので、それを主として担当させられていた。金網の幅は、四メートルぐらいか、とても大きかった。金網を敷いた後にどうしていたのかは見ていない。猫車で土を運んでいたのは記憶している。ほとんど全部手作業で、大きな機械を見た記憶もない。

鶉野では、兵舎等の建屋の記憶は全くない。コンクリート製の立派な滑走路があったという記憶もない。作業に行っても、点呼を取ったり、作業の指示や注意事項があったり、ということは全然なかった。現場で指図をする人はいて、「オイ、坊主」とよく言われたが、優しく接して大事に扱ってくれたので、次の作業にもまた行くことができた。

作業は、間をおいて、延べ半月ほどの間に四日間、いついつ来れるかと聞かれて、その日に行っていた。そうしたら同じ作業ばかりさせられた。進捗状況については、一々わからなかった。鶉野飛行場の作業をするからというような案内を受けて、滑走路のことが念頭にあったが、どこが滑走路だろうかと思っていた。飛行機が飛んでいた記憶も全然ない。作業が終わったら一目散に帰って食事の用意をしなければならなかったので、そこで作業時間を過ごすのが精いっぱいで、どの程度の規模のものか見て帰ろうというような余裕はなかった。野原へ行っていたというイメージだけが残っている。

時にはツルハシを使ったが、重いものだなと思った。スコップは小さいものや大きいものを持ったので、印象に残っている。ツルハシは一定の大きさのものが多数並べて置かれていた。一輪車（猫車）は、土砂を積むと子供では操作がなかなか難しかったことが印象深い。

現場では、格好から見て女の人がいるとは思わなかったけれど、名前を呼ばれて返事をする声を聞いて、女の人だなと思って、周囲を見ると、多人数の女性を発見し、妙に安堵した記憶がある。五十歳、六十歳ぐらいの人まで居られたが、懸命な働きぶりに勇気をもらった。

社から鶉野という距離は、母が父の運転でそこを走行するとき、「こんなに遠いんや」と言っては泣くと、父から聞いていた。私自身も車で通ったこともあるけれど、本当に遠いなと思うほどだった。一日遊びに行くというのとは違って、戦争に勝つための一念で、仕事に疲れても、辛いと思うことはなかった。母は「お疲れさん、よう頑張ったな、ありがとう」といっては、泣いたりした。家族の食事の用意だけはたいへんだった。妹が小さかったこともあって、どうやって何を作っていたのかな、と今も不思議にさえ思う。母の病人食といっても、過労で寝込んでいるということなので、特に食べてはいけないものがあるという状態ではなかったと思うが、家電もなく、食材不充分な中での苦心で、懸命の日々だった。